2023年11月18日

明石市歴史文化財係　義根益美

この「明石旧船町の家」の歴史

はじめに

1　大正時代末期の「明石旧船町の家」

蔵の棟札　　大正11年8月5日　平野英吉

母屋の棟札　大正11年8月5日　大工棟梁　魚住［　　］　住宅　平野［　　］

→所有者　平野英吉

①平野林蔵

明治25年（1892）船町で米穀商（『商工名鑑』明治25年）

明治28年（1895）10月31日　明石郡明石町戎町に明石貯蓄銀行を設立。資本金60000円(1)

②平野英吉

明治13年（1880）11月生まれ(2)。

大正6年（1917）から同7年の間に家督相続。明石貯蓄銀行の代表者となる(3)。商工社『日本全国商工人名録第七版』（大正8年）の「米穀商」欄に、「平野英吉」とあり、米穀商も相続したと思われる。

大正9年（1920）5月20日、高級電気絶縁物加工品、配線器具各種、ラジオ部分品、ランプスタンドの製造販売をする株式会社東洋電機具製作所を船町に設立。資本金 25 万円。横文字表記は“TOYO LITE”。取締役は平野英吉、平野養治、水田六三郎(4)。

大正11年（1922）、「明石旧船町の家」を建てる。

大正12年（1923）、明石貯蓄銀行を明石市樽屋町に移転、明石商工銀行と改称。資本金50万円（設立/明治28年10月31日）(5)

昭和3年（1928）、『人事興信録』（名古屋大学法学研究科）には「明石商工銀行(株)取締役」、「大正五年家督を相続す　現に明石商工銀行取締役たり　曩（さきに）岸本銀行監査役に就任せり」と記載される。

〈ラジオ〉

ＮＨＫは大正14年からラジオ放送を開始。

当時のラジオの多くは、真空管やスピーカー、トランスなどの部品を組み立てて作る「組み立てラジオ」で、現在のような完成品はまれだった。

〈電燈器具〉

明治43年頃、東京電気が米国ＧＥ社から部品を購入して真鍮ソケットの組立販売開始。

昭和5年頃、神保電器や東京電気、松下電器、神戸電器などがフェノール樹脂製のソケットやレ

セップ、プラグなどの製造を開始。この当時の絶縁材料は耐熱性が低い練り物または磁器だったが、フェノール樹脂はこの欠点を解決、国産化を促進する。

〈電器事業の普及啓蒙活動〉

大正7年(1918)、日本電灯協会は電灯事業の発展を図る目的で、上野忍池畔で電気博覧会開催。

大正13年(1924)、大阪で家庭電気普及会が設立され、翌14年には電気講習会が電気関係業者の普及啓蒙のために開催された。電化の必要性は、経済問題、燃料問題(薪や石炭の値上がりと資源保護)と保健衛生問題(生活改善)を解決、の側面から説かれている。

大正15年(1926)、社団法人電気協会が大阪で電気大博覧会を開催。3月20日より73日間行われ、万国博覧会並みの延べ290万人が見学した。

このほか、電気協会は博物館を利用して、家庭電化や生活改善の催しものを実施。(6)

電器具

大正七年四月船町平野英吉氏初めて電燈用ソケットを整す。大正九年これを株式組織となし、製品につき大いに工夫研究し、東洋ライトと称し、石灰酸、ホルマリン、不質繊維等混合より製する高級なる品を製するに至る。製品は電燈ソケット、モーター、扇風機等各種電燈用器具、ラヂオ部分品、家庭用品等を製するに至る。

大正十三年橋本電気は五分一町に業を開き、専らラヂオ部分品を製し、十五年には東王子に大工場を建設。ラヂオ部分品製作所としては本邦有数工場なり。最近他の電気器具も併せ製す。昭和四年八月日本電気製造株式会社明石分工場となる。明石の二大工場に於ける年生産額は六十万円を突破し、東洋有数の生産地なり。

(野田猪左雄『明石郷土史』大観尋常高等小学校、昭和四年)

【株式会社東洋電機具製作所】

大正9年(1920)5月20日設立。

昭和25年(1950)、社名を「東洋ライト株式会社」に変更。戦時中は軍需工場として無線部品などを成形、戦後は社員200人を擁し、高級ボタンの成形を行い、東南アジア各国へ輸出していた。昭和30年代からは子供用玩具等の製造を開始、昭和45年頃よりウレタンによるシューズのソール成形を実施、エンプラ関係の成形に特化して現在に至る(7)。

昭和43年の代表者は船橋正。所在地は材木町6番17号。プラスチック釦、一般成型品及び金型を製造(8)。

昭和49年(1974)『ゼンリンの住宅地図　第1部』の船町周辺地図に東洋ライト株式会社はなく、跡地は整備され南北道がつき、住宅が建ち並ぶ。

【注】

(1)大蔵省監察局編纂『第五回　銀行総覧』明治31年8月刊行、大蔵大臣官房銀行編纂『第二十回銀行総覧』濱田活版所、大正2年8月刊行。

(2)名古屋大学法学研究科「人事興信録」。

(3)大蔵省銀行局編纂『第廿五回　銀行総覧　全』東京製本合資会社、大正7年9月。

(4)栄原琢『明石商工名鑑』明石商工会議所、昭和4年。栄原琢『明石商工名鑑』明石商工会議所、昭和9年。

水田六三郎は、株式会社東洋電機具製作所（船町104、大正9年5月）、統合元山石炭株式会社（船町3、大正10年2月）、株式会社水田商店（船町49、大正11年5月）の代表者として明石商工会議所 編『第1回(昭和6年版)　明石商工会議所統計』(明石商工会議所、昭和7年）に記載される。

(5)大蔵省銀行局編纂『第三十回　銀行総覧』

(6)前島正裕「電力技術の発達から見た我国の家庭電化に関する一考察」国立科学博物館 Bulletin of the National Science Museum. Series E, Physical sciences & engineering 16:1993

(7) 西日本プラスチック製品工業協会「会員様企業ご訪問：Vol.79　東洋電機株式会社（兵庫支部）2006年 ct.nishipla.or.jp/site/pdf/83.t_kigyoshokai/79.pdf」

(8) 明石市・明石市商工会議所『明石商工名鑑（昭和43年版)』昭和43年3月)。

2　昭和10年代の「明石旧船町の家」

平野家が「明石旧船町の家」と「東洋ライト株式会社」を手放した時期は不明だが、手放し先は異なっていたようである。

昭和10年代に小学生だった子どもが書いた平面図と現在の間取りは、若干異なっている。また、屋敷の大きさは「縦　二十間/横6間」、形は「矩形　百二十坪」、家は「お庭を囲んだやうにして百坪」、「家の周り五十二間」、風通しや日光をよく受けるあめに「ガラスまど、ガラス天井」の工夫をしていると記される。

昭和15年の内務省訓令により町内会の設置が義務付けられると、「明石旧船町の家」は町内会長の家としての役割を担うようになる。

→展示中の「回覧板が語る船町町内会　―昭和17年の配給物資を中心に―」をご覧ください。